

国語科通信(3学年) その5

●古典の世界の「疫病」

令和2年4月30日

①高1の『羅生門』で老婆が死人の髪の毛を抜く場面で、次のような老婆の言葉があったのを覚えていますか。

「ここにいる死人どもは、みな、そのくらいなことをされてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、帯刀帯の陣へ売りに往んだわ。えやみ疫病にかかって死ななったら、今でも売りに往っていたことである。」脚注には「疫病」：流行病とあります。「疫病」は古語では、「えやみ」と言っていました。

②「疫」は、急性の伝染病を意味します。「検疫」「免疫」などという熟語も現在頻繁に目にします。

③古くは、流行病は「やく疫病神」という鬼のたたりによって発生すると考えられていました。

④人の目に見えないことが「恐怖」「不安」を増大させるわけですが、古代の人も、何とかして、目に見えるように、つまり、「鬼」の姿として描く、語ることによって、その「不安」や「恐怖」と向き

合おうとしたというのです。

⑤古語では病気が治ることを「おこたる」と言いますね。病気の原因である悪霊や鬼が仕事を「おこたる(怠ける)」ことが「病気が治る」ことだったわけです。

⑥今、ニュース冒頭で、顕微鏡で捉えた「コロナウィルス」の写真が必ず映し出されるのも、実は、何とかして、人間が「可視化」し不安を押さえようとする働きかもしれないと、先日観た「日曜美術館」で紹介があり、納得させられました。「見えない」ものを「恐れる」心性は、どんなに科学が発達しようとも変わらないのでしょう。

⑦科学が発達していない古代、人知の及ばないものがあると人々が「畏怖」を忘れていなかった時代、「疫」(鬼)は完全制覇する対象ではなく、何とか折り合いをつけ、せいぜい「退散」してもらう対象だったようです。

⑧感染症の拡大を防ぎ日常を取り戻すことは、今や世界共通の喫緊(きっきん差し迫って対策すべき)の課題であることは当然なのですが、最先端の科学技術、医療技術をもってしても今後いっさい、世界中のあらゆる「感染症」を根絶することはできない、「いた

ちごっこ」のように常に人間は感染症と向き合う存在であり、菌に冒される「生き物」であることを忘れてはいけない。

古代の人の姿、歴史からも学びたいと思います。